『世界の日本語教育』12, 2002年6月

継起的時間関係と従属節のアスペクト

黄　文　溥*

キーワード:　後続・先行関係，先行・後続関係，時間節，アスペクト

要　旨

従来，時間節の事態と主節の事態が継起的である場合，① 時間節の述語動詞のアスペクト形式が同一でその形式が表すアスペクト的な意味も同じだと考えられる立場と，②「(スル)前」節と「(シタ)後」節のアスペクト形式がスルかシタかをとり，それぞれ違うアスペクト的な意味を表し，その違いをスルとシタのアスペクト的対立と考える立場がある．本稿では，「(する)まで」節や「(し)てから」節などをも考察し，時間節のスルもシタもシテも同じく完成相形式で，そのアスペクト的な意味の違いを含め，それぞれの時間節のアスペクトの異なったあり方は後続・先行関係や先行・後続関係などといった時間関係と関連するということを論じる．具体的には次のような事実を指摘する．(1) 後続・先行関係を表す「前(に)」複文と先行・後続関係を表す「後(で)」複文や「(して)から」複文とで時間節の述語動詞の完成相の表すアスペクト的な意味やその他のアスペクト的な性格が異なっている．(2)「前(に)」節や「まで」節の述語動詞の完成相が〈終了限界達成≠ひとまとまり〉を表す場合，無限界動詞に制限が見られ，「後(で)」節や「(して)から」節の述語動詞の完成相が〈開始限界達成≠ひとまとまり〉を表す場合，多くの動詞に制限が見られる．(3) この種の制限は継起的時間関係が捉えられる他の従属節(「(しない)うち(に)」節や「するのを待つ」の「するのを」節)にも見られる．

1. はじめに

複文の時間関係には従属節の事態と主節の事態の時間関係として継起関係と同時関係があり，前者には後続・先行関係や先行・後続関係がある．複文の中には「～前(に)...」「～後(で)...」「～時(に)...」のような，時間関係が形式上明示されている時間的従属複文があり，本稿では特に後続・先行関係や先行・後続関係といった継起的時間関係を表す時間的従属複文の代表形式である「前(に)」複文・「まで」複文と「後(で)」複文・「(して)から」複文を考察の対象とする．その他に継起的時間関係がみられる「しないうち(に)」複文と「するのを待つ」複文も取り上げて検討する．継起的時間関係を捉える複文では，従属節の述語動詞が基本的に「する」や「した」

* HUANG Wenpu:　華僑大学外国語学院講師．

といった完成相アスペクト形式をとる．本稿はそういった複文にみられる継起的時間関係とその従属節述語のアスペクトとの関わりについて論じるものである．

2. 問題のありか

単文の述語や主節の述語と従属節の述語とでテンス・アスペクトに異なる面があり，従属節でも規定語になる述語(即ち連体節の述語)と時の状況語になる述語(即ち時間節の述語)とで構文的な機能に応じてテンス・アスペクトに異なる面があるといったことが従来の研究によって指摘されている(鈴木 (1965)，高橋 (1974)，工藤 (1989) 参照)．そして，時間節の述語でもそのテンス・アスペクトが，時間関係が継起的であるか同時的であるかによって違うことが工藤 (1992) で指摘されている．それによると，前者の場合ではスル形式(以下ではスルまたは完成相スル)とシタ形式(以下ではシタ)がテンス的に相対的テンスの対立をなしているが，後者の場合では相対的テンスの対立をなさない．また，アスペクト的には前者の場合(「前(に)」節や「後(で)」節等)では運動動詞完成相のみが現れるが，後者の場合(「間(に)」節や「うち(に)」節等)ではそれだけではなく，運動動詞の継続相や存在動詞や形容詞や名詞述語といった完成相以外のものもくるという．テンスや同時的時間関係に関しては本稿の研究対象外なので，それらに関する従来の議論を詳しく扱わないが，アスペクトに関しては，後続・先行関係の場合や先行・後続関係の場合を問わず，時間節の完成相形式が同じアスペクト的な意味を表すと考えられている．

それに対して，「前(に)」複文と「後(で/に)」複文とで，時間節のスル形式の実現するアスペクト的な意味が違うという指摘が出されている(例えば，近藤 (1993) 等)[1]．

(1) a. そんなつまらんことを<u>言うまえに</u>，まあ，ほせよ．(真実)
　　b. 貞春は悔みを<u>言った後に</u>尋ねた．(神の)

(1) a の完成相「言う」は〈開始限界達成〉を表すのに対して，b の完成相「言った」は〈終了限界達成〉を表す．従来のこうした指摘は「前(に)」節と「後(で)」節に対する考察に限られ，時間節のスルとシタといった形式上の対立として捉えられている．

しかし，スルなのかシタなのか形式上示されていない「(して)から」節も下例のように「後(で)」節と同じくアスペクトが〈終了限界達成〉を表すといったことをも視野に入れて考えられないわけではない．

(1) c. 家に着いて，玄関の戸を開けると，トットちゃんは，「ただいま」と<u>いってから</u>，ロッキーを探した．(窓ぎ)

[1] 様々な点において違うことがあるが，「前(に)」節のスルと「後(で)」節のシタとのアスペクト的対立に関しては，近藤 (1993) に似たような議論を展開するものに岩崎 (1999) 等がみられる．

そして，従来では〈開始限界達成〉を表すスルと〈終了限界達成〉を表すシタとの対立はあくまでも「前(に)」節と「後(で)」節に限定されているので，広く継起的時間関係を表す時間的従属複文の時間節(以下では継起的な時間節)のスルとシタの対立として一般化ができない．例えば，同じくスル形式をとると考えられている「まで」節は「前(に)」節とはアスペクトが必ずしも同じではない．

（1） d. みんな，俺がもういいというまで，放しちゃいけねえよ．（肉体の門）

d の完成相「いう」は〈ひとまとまり〉を表すのである．このように，「前(に)」節と「後(で)」節を見るのが非常に重要なことであるが，それだけではなく，広く継起的な時間節のアスペクトを検討し，一般化を行う必要もあると考えられる．

本稿では包括的ではないが個別的に継起的な時間節のアスペクトやその他のアスペクト的な性格を考察し，後続・先行関係を表す時間的従属複文と先行・後続関係を表す時間的従属複文とでその時間節述語のアスペクト的な意味の違いを捉え，それによって，工藤 (1992) で指摘された継起的時間関係と同時的時間関係とで時間節のとるアスペクト形式が違うということに止まらず，後続・先行関係と先行・後続関係によって時間節のアスペクトが同じ完成相形式をとっても違うありかたを見せるということを論じる．また，継起的時間関係がみられる「しないうち(に)」節や「するのを待つ」の従属節のアスペクト的な性格についても考察する．

3. 継起的時間関係を表す時間節のアスペクト的な性格

本節では主として継起的な時間節の代表形式である「前(に)」節，「まで」節，「後(で)」節，「(して)から」節の完成相動詞の実現するアスペクト的な意味について，包括的で精密な記述にはほど遠いが，その典型的な場合に注目し概略をおさえておく．その際に限界性といった動詞の語彙・文法的な意味との関連や限界性と関わる「しはじめる」や「しおわる」といった派生動詞との関連についてもふれる．そして，それを通して後続・先行関係を表す複文の時間節のアスペクトと先行・後続関係を表す複文の時間節のアスペクトとの違いを検討する．なお，記述が基本的に実際の使用例に基づいてなされることを断っておく．

本題に入る前に〈ひとまとまり〉，〈限界達成〉及び限界といった概念についてふれておきたい．

(a) 〈ひとまとまり〉は完成相スルが表す意味である．運動をまるごとにとらえ，その始め，なか，終りが合せて一つになることを〈ひとまとまり〉とする．が，完成相の意味は〈ひとまとまり〉だけでは捉え切れないものがある．例えば，「9時に帰るよ」という場合，完成相動詞は〈ひとまとまり〉を表さず，〈限界達成〉を表すのが普通である．このように完成相の意味には〈ひとまとまり〉と〈限界達成〉がある．この二つは運動を

異なった角度から把握するもので，必ずしも相互排除的ではないということが工藤(1995)で指摘されている．例えば，動作の終了を捉えていなければ「窓を閉めた」とは言えないということで，「(窓を)閉める」という動作が〈ひとまとまり〉に捉えられているとともにその動作の終了限界達成も焦点化され捉えられている．つまり〈ひとまとまり＝終了限界達成〉ということになるのである．この場合の〈終了限界達成〉は動作を分割的に捉えているわけではないので，動作を分割的に捉えている〈終了限界達成≠ひとまとまり〉の場合(即ち，ひとまとまりとは捉えられない運動の終了限界達成を表す場合)と区別しなければならない．こうした解釈の可能性は動詞の語彙的な意味と関連するだけではなく，構文的な性格や文脈・場面とも関連する(工藤(1995)参照)．例えば，「全部食べる」や「夕飯を食べた後で寝た」においては「食べる」という動作が〈ひとまとまり＝終了限界達成〉として捉えられている．そして，例えば「夕飯を食べる前にお風呂に入った」においては「食べる」という動作がひとまとまりに捉えられているとともに，開始限界達成も焦点化され捉えられている．「食べる前に」という表現に対してひとまとまりの以前という解釈と開始限界達成以前という解釈はどちらも同じように成り立つのである．なお，この場合の〈ひとまとまり〉も動作を分割的に捉えている〈開始限界達成≠ひとまとまり〉の場合(即ち，ひとまとまりとは捉えられない運動の開始限界達成を表す場合)と区別しなければならない．

(b) 限界には開始限界と終了限界があり，開始限界と終了限界が一つになっていて，それ自体が限界になることもあるが，過程がある場合に，開始限界と終了限界が取り出せると考えられる．過程にも動作過程や変化過程や結果維持過程など様々なものがあり，それによって，開始限界も終了限界も様々に異なると考えられる．

3–1. 「前(に)」節

従属節の事態と主節の事態に後続・先行という時間関係があることが明示されている「前(に)」複文では，従属節の述語動詞が瞬間性を持つ場合は，完成相スルが瞬間的運動を〈ひとまとまり〉として捉える．過程性を持つ動詞の場合は，完成相スルが例(2)～(4)のように基本的に〈開始限界達成〉を表し，スルの表す運動が〈ひとまとまり〉として捉えられるという解釈も成立するので〈開始限界達成＝ひとまとまり〉である．

(2) 鐘が鳴るまえに，尾崎ふみ子先生はグラウンドに出ていた．(人間)
(3) 焼く前に門番が獣の頭をなたでちょん切るんだ．(世界)
(4) 彼女は顔を洗う前に，寝床で紅茶とミルクを飲みます．(痴人)

そして，使用例がずっと少ないが，例(2)～(4)とは違って，例(5)(6)では，従属節の運動

がすでに始まっており，その運動の終了限界達成以前に(即ちその運動過程と同時に)主節の事態が生じるということが捉えられる．従属節の完成相スルは〈終了限界達成〉を表し，スルの表す運動がひとまとまりに捉えられないので〈終了限界達成≠ひとまとまり〉となる．

（5） 三原が帰るのを，安田は出口まで送ってくれた．あいかわらず，落ちついた，不安のない態度であった．

三原は，本庁に帰る前にいつも行きつけの有楽町の喫茶店にはいってコーヒーを注文し，手帳を見ながら，安田の言ったことを紙に表に書いて整理した．（点）

（6） 金田一耕助が謎を解く前に，一発の銃弾が飛鳥を襲った．（金田）

過程性を持つ動詞は〈開始限界達成〉を表すことができる．〈終了限界達成≠ひとまとまり〉を表すには，過程性を持つ動詞の一部に限られる．語彙的な意味の中に終了限界が組み込まれない無限界動詞は基本的に〈終了限界達成≠ひとまとまり〉を表すことができないが，無限界動詞の代りに終了限界を捉える「しおわる」「しやむ」のような派生動詞を用いることで〈終了限界達成≠ひとまとまり〉を表すことができる．すでに述べてあるが，「前(に)」節のスルが〈終了限界達成≠ひとまとまり〉を表す場合，従属節の運動の終了限界達成以前に(即ちその運動過程と同時に)主節の事態が生じることが捉えられる．つまりその裏に時間的同時性が潜んでいるわけである．主節の事態に後続する事態(運動)を捉える「前(に)」節においては，同時性が前面に出てくるのを防ぎ従属節の事態(運動)の後続性を構文上保証するためにその運動の終了限界がどうしても欠かせないので，終了限界の明示が要求されるのである．

（7） 貫太郎は，したたかに静江を殴りつけた．殴り終る前に，躍り上るようにして飛び込んだ上条の物凄いアッパーが，貫太郎の顎を見舞っていた．（寺内）

【「殴る前に」に換えると意味が違ってくる】

（8） 警察署へ電話をかけようとして，窓に背を向けた瞬間，執務机の上の電話が鳴った．内線電話だ．藤咲町長は二回目が鳴り終わる前に，ひったくるように受話器を取り上げた．心拍が跳ね上がる．(闇の)

【「鳴る前に」に換えると意味が違ってくる】

（9） 徹吉は，低く長くだらしなく際限なくわらう女を，はっとして気おされた気分で見つめていた．それから彼女が笑いやむまえに，くるりと彼女に背を向け，かなり足早に自宅の方へ引返していった．(楡家)

【「笑うまえに」に換えると意味が違ってくる】

3–2. 「まで」節

従属節の事態が主節の継続する事態の終了限界として捉えられる「まで」複文では，二つの事態に後続・先行という時間関係がある．時間関係に限ってみれば，「まで」複文では主節の事態の

終了点と従属節の事態と重なり即ち同時的になるので，主節の事態の生起が従属節の事態より先というような後続・先行関係を表す「前(に)」複文とは違う．この違いは時間節のアスペクトの違いにも繋がっていく．

従属節の述語動詞が瞬間性を持つ場合は，完成相スルが瞬間的運動を〈ひとまとまり〉として捉える．過程性を持つ動詞の場合は，完成相スルが例 (10)〜(12) のように基本的に〈ひとまとまり〉を表し，しかも主節の事態の時間的な限界として働くのに「まで」節のスルが〈終了限界達成〉を捉える必要があるので，〈ひとまとまり＝終了限界達成〉となる．

(10) 「待ってて！ あたしが洋服を着るまで待っててよ！ ああ，なにを着たらいいんでしょう．リノが選ぶのよ，早く，早くったらぁ」（愚者）

(11) 「それから宇田川町から本郷まで，遠い道を一刻もかかって辿り着いたことだろうが，この田原屋の店先へ来て仲人の伊賀屋さんが駕籠の扉を開けるまで，誰も花嫁の顔を見た者がないわけだな」（銭形）

(12) この兵士は後で収容所へ来たが，彼はこの時三発撃ったといっている．この話を聞くまで私は一発聞いたと思っていた．（俘虜記）

そして，使用例がずっと少ないが，例 (13) のように，従属節の運動が主節の事態と同時に或いはそれよりも前に始まっており，従属節の運動の終了限界が主節の事態の継続する終点となる場合がある．従属節の完成相スルは〈終了限界達成〉を表すが，スルの表す動作が分割されて捉えられるので，〈終了限界達成≠ひとまとまり〉となる．このように，「するまで」節においては，〈ひとまとまり〉が〈終了限界達成〉として解釈できても，その逆は必ずしも成立しないのである．

(13) 高男は勢谷を促すように自分から先に部屋を出た．それ以上多津子に関する話を聞いているのは辛かった．...(中略)...
高男は勢谷の多津子に関する話は途中で遮ったが，自分一人になると，自分の店へ帰るまで，三石多津子のことばかり考えていた．（射程）

また，例 (14) のように従属節の完成相スルが〈開始限界達成≠ひとまとまり〉を表すことがある．

(14) 吾等は列車の動くまでその前に立ていたパイプが鳴って車が前進をはじめると，
「左様なら富岡様左様ならおッ母さま左様なら！」
と老婆はおろおろ声で言って口の中で念仏を繰返した，（死）

「まで」節の完成相スルは，述語動詞が過程性を持つ場合は基本的に〈ひとまとまり＝終了限界達成〉を表すという点で「前(に)」節の場合と異なるが，〈終了限界達成≠ひとまとまり〉を表すという点で「前(に)」節の場合と同じである．また，「前(に)」節と同じく，無限界動詞は基本的に〈終了限界達成≠ひとまとまり〉を表すことができないが，代りに「しおわる」のような派

生動詞を用いることでそれを表すことができる．すでに述べてあるが，「まで」節のスルが〈終了限界達成≠ひとまとまり〉を表す場合，「まで」節の運動が主節の事態と同時に或いはそれよりも前に始まっており，「まで」節の運動の終了限界が主節の事態の継続する終点となることが捉えられる．つまりその裏に「まで」節の運動過程と主節の事態に時間的同時性が潜んでいるわけである．従って，主節の事態に後続する運動を捉える「まで」節においては，従属節の運動過程と主節の事態の同時性が前面に出てくるのを防ぎ，従属節の運動の時間的後続性を構文上保証するためにその運動の終了限界がどうしても欠かせないので，終了限界の明示が要求されるのである．

(15) 「もっと聞いたら思っとったら，人が来たよってあわてて逃げたわ」
「そいつは惜しかったな」
と植は本当に惜しそうにいった．
「まだあるんよ，それからが大傑作．...(中略)...」
突然妙子は腹を押えて笑い出した．妙子が笑い終るまで，植はじっと待っていた．彼は微笑さえも浮かべていなかった．
「婦長，階段から足踏み外して落ちたのよ，どんどん，と．...(中略)...」(背徳のメス)
【「笑うまで」に換えると意味が違ってくる】

(16) 彼女はまたポケットから煙草とライターをとり出して火をつけようとしていたが，ベッドの上のぼくからは，また彼女のあの柔らかく息づく裸の乳房がよく見えた．そして彼女は，吸いこんだ煙をまたゆるやかに吐き出しながらぼくをじっと見つめ，例の目と唇の両端をキュッとさせる独特の表情でぼくに微笑みかけた．ぼくはまた微笑み返そうとしたが，今度は硬ばってしまってもううまくはいかなかった．ぼくがすべきことはなにか他にあるということが，はっきりと分ったように思えたから．でも何を，そしてたとえば彼女が煙草を吸い終るまで待つべきなのだろうか．(赤頭)
【「吸うまで」に換えると意味が違ってくる】

(17) 証言は少しずつ区切って喋り，通訳はそれを訳す．しかし次に何を言うか，言い終るまでわからないから，フェザーストン弁護人はストップをかけることはできなかった．(なが)
【「言うまで」に換えると意味が違ってくる】

3–3. 「後(で)」節と「(して)から」節

従属節の事態と主節の事態に先行・後続という時間関係があることが明示されている「後(で)」複文と「(して)から」複文では，従属節の述語動詞が瞬間性を持つ場合は，完成相スルが瞬間的運動を〈ひとまとまり〉として捉える．過程性を持つ動詞の場合は，完成相スルが基本的に〈終了限界達成〉を表す．例(18)〜(21)では，スルの表す運動が〈ひとまとまり〉として捉えられるという解釈も成立するので〈終了限界達成＝ひとまとまり〉となる．

(18) 蛾を殺した後，妙に空腹を感じて冷蔵庫にあった食べ残しの冷たいローストチキンを齧った．(限り)

(19) 看護婦が，シーツをかけた毛布で僕を包んだ後，学生のベッドに近づいて行った．（他人の足）
(20) 荻江は荷物をおき，手足を洗ってからようやく落ちついて辺りを見廻した．（花埋）
(21) 彼はさけびながら，壁沿いにふらふらと扉の方へのめっていった．そして，扉をあけてからふりむいた．（驢馬）

そして，使用例がずっと少ないが，例 (22)〜(25) のように，従属節の運動が開始限界に到達した以後(即ちその運動過程と同時に)，主節の事態が生じるということがとらえられる場合がある．従属節の完成相スルが開始限界達成を表し，スルの表す動作が分割されて捉えられるので，〈開始限界達成 ≠ ひとまとまり〉となる．

(22) ぎんは皆が帰ったあと袖をからげ，部屋を掃いていた．（花埋）
(23) 疲れた節子が眠ったあと，私はそのそばでとりとめなく本の頁をめくり，病院の外から訪れてくる物音に耳を澄ませて，時を過ごした．（され）
(24) 民子は雑巾がけをしてからうっかり忘れてしまって，蓆を入れずに野へ出た処，間がわるく其日雨が降ったから，其蓆十枚許りを濡らしてしまった．民子は雨が降ってから気がついたけれど，もう間に合わない．（野菊）
(25)「電車が走ってからお読みになって．」（忍ぶ川）

〈開始限界達成 ≠ ひとまとまり〉を表すことができるのは「降る，(電車が)走る，勤める，帰る，行く」など開始限界が(も)際立って捉えられる一部の動詞に限られる．過程性を持つ動詞の多くはそのような用法を持たず，代りに「しはじめる」などの派生動詞を用いることでそれを表すことができる．すでに述べてあるが，従属節のスルが〈開始限界達成 ≠ ひとまとまり〉を表す場合，従属節の運動が開始限界に到達した以後(即ちその運動過程と同時に)，主節の事態が生じるということが捉えられる．つまりその裏に時間的同時性が潜んでいるわけである．主節の事態に先行する事態を捉える「(して)から」のような時間節においては，同時性が前面に出てくるのを防ぎ従属節の事態の先行性を構文上保証するためにその運動の開始限界を際立たせる必要があり，開始限界の明示が要求されるのである[2]．

(26) ミチ子はアスファルト道路を歩きはじめてから，何か忘れものをしたことに気がついた．（アメ）
(27) 霧子が食事にとりかかると，麻生も一緒に箸を持った．麻生は中途で食事をやめて，霧子がたべはじめるのを待っていたのである．男性の前で，独り御飯をたべるのは，あまり気楽なことではない．そういう不必要な窮屈な思いを，霧子にさせないよう配慮して，麻生は待っていたのである．そして御飯をたべはじめてからも，先に食べおわらないよう，ゆっくり食事をすすめていた．（さき）

以上では「前(に)」節，「まで」節，「後(で)」節，「(して)から」節のアスペクトについて大雑

[2] 実際の用例を調べると，「(し)はじめた後(で)」がわずか 2 例しか見つからず，「(し)はじめてから」と比べて，ずっと少ない．「後(で)」節のアスペクトと「(して)から」節のアスペクトに違いがあることの現れかもしれない．

把な記述を試みた．意味が明確に区別された典型的な場合のみを取り扱っており，曖昧なものやその他の可能性，そして動詞の個別的なアスペクト的な素性との関連などについて殆どふれることができなかったきらいがあり，不十分である．以下では大まかなところをおさえる程度にまとめておきたい[3]．

（イ）「前(に)」節と「後(で)」節・「(して)から」節とで，述語動詞が過程性を持つ場合，次のようにそのアスペクトが正反対になっている．

「前(に)」節: 基本的に〈開始限界達成〉を表す
〈終了限界達成〉が二次的になる

「後(で)」節・「(して)から」節: 基本的に〈終了限界達成〉を表す
〈開始限界達成〉が二次的になる

（ロ）「前(に)」節・「まで」節と「後(で)」節・「(して)から」節とで，次のようにアスペクトのあり方が異なる．

「前(に)」節・「まで」節: 〈終了限界達成≠ひとまとまり〉を表す場合，終了限界が語彙的な意味に組み込まれない無限界動詞に制限が見られる．それを表すには「しおわる」などのような派生動詞が用いられる[4]．

「後(で)」節・「(して)から」節: 〈開始限界達成≠ひとまとまり〉を表す場合，多くの動詞(特に開始限界が際立たない動詞)に制限が見られる．それを表すには「しはじめる」などのような派生動詞が用いられる．

(イ)は後続・先行関係を表す「前(に)」複文と先行・後続関係を表す「後(で)」複文・「(して)から」複文の時間節のアスペクトの違いであるが，(ロ)は後続・先行関係を表す複文と先行・後続関係を表す複文の時間節のアスペクトの一般的な違いだと考えられうるかもしれない．すでに述べてあるが，従属節の完成相スルが〈終了限界達成≠ひとまとまり〉または〈開始限界達成≠

[3] 曖昧なものというのは，例えば「前(に)」節のアスペクトとして〈開始限界達成〉か〈終了限界達成〉かはっきりと区別できず，そのどちらともいえないものをさす．例えば，「窓を開ける前に手に傷があるのに気がついた」というような場合，「窓を開ける」という動作の開始限界達成以前に気がついたことも窓を開けている時に気がついたこともあるように思われる．また，その他の可能性というのは，例えば，「してから」節のアスペクトとしては，〈終了限界達成＝ひとまとまり〉と〈開始限界達成≠ひとまとまり〉の他に，〈終了限界達成≠ひとまとまり〉も考えられるといったような場合である．帰宅途中の人が家に電話で「帰ってからゆっくり話そう」という場合，完成相「帰る」は〈終了限界達成≠ひとまとまり〉を表すのである．

[4] 無限界動詞はまた「全部(読む)」「2キロ(走る)」などのような終了限界を示す構文的な要素と組み合わさって〈終了限界達成≠ひとまとまり〉を表すことができる．例えば，「全部読む前に字が消えてしまった」．が，確実な実例が殆ど出ていないので，本稿では考察を控えることにしたい．なお，限界動詞には様々なものがあり，無限界動詞にみられるような制限を持つ場合があるかどうかに関しては本稿では考察することができていない．

ひとまとまり〉を表す場合，その裏に時間的同時性が潜んでいる．同時性が前面化するのを防ぎ後続性なり先行性なりという構文上の性格を保証するために，どうしても終了限界または開始限界を明示する必要が出てくるのである．

そのため，時間関係の違いに応じて，終了限界または開始限界を表す表現形式に必須的なものと任意的なものが出てくる場合がある．

(28) a. 読みおわる前に，字が消えてしまった．
b. 読む前に，眼鏡がないのに気が付いた．
(29) a. 行助は手紙を読みおわってから頭をかいた．（冬の）
b. 行助は手紙を読んでから頭をかいた．

(28) の a 文と b 文では「読みおわる前に」と「読む前に」とでアスペクト的な意味が違うのに対して，(29) の a 文と b 文は「読みおわってから」と「読んでから」とでアスペクト的な意味が同じである．同じ終了限界達成を表すにも，「読みおわる」という表現形式は，後続・先行関係を表す (28) においては必須であるのに対して，先行・後続関係を表す (29) においては任意である．なお，補足となるが，時間節の完成相スルのアスペクト的な意味が〈開始限界達成〉なのか〈終了限界達成〉なのか曖昧性を持つ文があるが，そのような文とは違って，「しおわる前(に)」のような時間節では完成相スルは〈終了限界達成〉という意味が一義的に決まるので，「しおわる」は意味の明示化という機能を持つ場合がある．

逆に，同じく開始限界達成を表すには，「飲みはじめる」という表現形式は，(30) のような後続・先行関係を表す「する前に」複文においては任意であるのに対して，(31) のような先行・後続関係を表す「してから」複文においては必須である．なお，いうまでもなく「しおわる」と同じく「し始める」も意味の明示化という機能を持つ場合がある．

(30) a. 夕飯を食べ始める前にお祈りをする．
b. 夕飯を食べる前にお祈りをする．
(31) a. 夕飯を食べ始めてからスープを作り忘れたことに気が付いた．
b. 夕飯を食べてからスープを作り忘れたことに気が付いた．

これまで主として時間関係の違いに応じて時間節の述語動詞の完成相の実現するアスペクト的な意味のあり方も違ってくることについてみてきたが，以下では時間関係とかかわるその他のアスペクト的な性格の違いについてもふれてみたい．

従来指摘されていることだが，継起的な時間節のアスペクトは完成相に限られている．が，実例が少数ながら，次のようにシテイル(シテイテ・シテイタ)形式が現れることがある．こうした場合のシテイルはよく「しばらく」など期間性を表す副詞(句)を伴って使われ，ある期間内に動作が持続することを表す．スル(シテ・シタ)に置き換えてもアスペクト的な意味が変わらないの

で，完成相と中和すると見てよいだろう[5].

(32) 一分ほど，じいっとしていてから，秀子の父親に会うために，事務室を出た．（定年）
(33) 千鶴子は急に視線を変えて塩野を見詰めていてから，彼と知人たちの会話の途切れる隙を見て傍へよっていった．（旅愁）
(34) しばらく黙っていた後で，「主よ，何ゆえ外で泊られるや」と小声で問うた．（城外）
(35) ややしばらく黙ってそこに立っていた後，エトランゼエが私に言った．（海へ）

ここで注目したいのは，(32)〜(35) に示されるように先行・後続関係を表す複文の時間節にシテイルが現れることができるが，それに対して「前(に)」節や「まで」節のような後続・先行関係を表す複文の時間節にはシテイルが現れることができない点である．

また，「後(で)」節や「(して)から」節のような先行・後続関係を表す複文の時間節の完成相スル(シテ・シタ)が「しばらく」「長い間」など期間性を表す時間副詞(句)と共起して使われることができるのに対して，「前(に)」節や「まで」節のような後続・先行関係を表す複文の時間節の場合はそれができない．

(36) しばらく歩いてから曇った声で，「...(中略)...」と言った．（青春）
×しばらく歩く前に... / ×しばらく歩くまで...
(37) 僕は長いあいだじっと眺めてから顔をあげて，となりに立った彼女の顔を見た．（世界）
×長いあいだじっと眺める前に... / ×長いあいだじっと眺めるまで...
(38) 食事を済ませ，コーヒーを呑み，しばらく雑談したあとで，私たちは内藤のアパートへ行くことになった．（一瞬）
×しばらく雑談する前... / しばらく雑談するまで...
(39) 幸穂ちゃんは，長男(七つ)と午後八時ごろまでテレビを見て遊んだ後，寝たという．（朝日）
×八時頃までテレビを見て遊ぶ前... / 八時頃までテレビを見て遊ぶまで...

このようにシテイルが現れうるか否か，完成相スルが期間性を表す副詞(句)と共起して使われうるか否かで，先行・後続関係を表す複文の時間節と後続・先行関係を表す複文の時間節とで，アスペクト的な性格が異なる．

4. その他の従属節のアスペクト的な性格

以上，「前(に)」節・「まで」節と「後(で)」節・「(して)から」節でアスペクト的な性格が違うということを見てきた．その中で，前者では〈終了限界達成≠ひとまとまり〉を表す場合，無

[5] 例 (35) の「立っていた後」を「立った後」に置き換えにくいと指摘する母語話者も置き換えられると判断する母語話者もいる．

限界動詞に制限が見られ，後者では〈開始限界達成≠ひとまとまり〉を表す場合，多くの動詞(特に開始限界が際立たない動詞)に制限が見られるという点に注目した．本節では「しないうち(に)...」や「するのを待つ」のような，継起的時間関係がみられる他の複文にも同じような制限がみられることを大まかに見てみたい[6].

4-1. 「しないうち(に)」節

久野 (1973) や Nakau (1976) で指摘されたことだが，「しないうち(に)」複文には従属節の事態と主節の事態に後続・先行という時間関係の解釈ができる．そういう意味で後続・先行関係を表す「前(に)」複文と似ているところがある．「しないうち(に)」節は過程性を持つ動詞の場合，多くは例 (40) のように開始限界達成以前を表すが，わずかながら例 (41) のように終了限界達成以前を表すこともある．

(40) 私はあの雑誌のあなたの文章を，読まないうちにお別れしたかったと思います．(人間)

(41) それは邯鄲の歩みを学ばないうちに寿陵の歩みを忘れてしまい，蛇行匍匐して帰郷したと云う「韓非子」中の青年だった．(歯車)

そして終了限界達成以前を表すには，従属節の述語動詞が無限界動詞の場合，無条件に使うことができず，例 (42)〜(46)のように「みなまで」「すべてを」など構文的に終了限界を示す要素の明示が必要である．

(42) 「突然伺いましたが，私共はかみきの親戚の者で，...」
文太がみなまで言わないうちに，「ああ，判りました．中学へ行ってらっしゃる子供さんのことで?」(夏草)

(43) 葉子は倉地の見ている前で，その凡てを読まない中にずたずたに引裂いてしまった．(或る)

(44) 思い出すことを半分も話さないうちに，洪作は強制的に寝かされた．(しろ)

(45) が，二頁も読まないうちにいつか苦笑を洩らしていた．(或阿)

また，「しおわる」などの派生動詞が使われることもある．

(46) さいしょの爆音は，おくれたサイレンが鳴り終わらぬうちに，われわれの頭の真上を，建物の屋根すれすれにかすめていった．(驢馬)
【「鳴らない内に」に換えると意味が違ってくる】

(47) 二，三日前に煮たものであろうが，空腹は耐えがたかったから皮まで貪り食った．齧りおわらぬう

[6] 「しているうち(に)」複文は主節の事態と従属節の事態との時間的同時性を表す．「しないうち(に)」複文もこれといっしょに扱う考えがある(言語学研究会・構文論グループ (1988) 参照)．そうすれば，「しないうち(に)」複文にみられる継起的時間関係という解釈と「前(に)」複文の表す継起的時間関係が異なるものとなる．従って，本稿では「しないうち(に)」複文を「前(に)」複文と同じ類の複文として扱わないことにしたい．

ちに蠅が，手のまわりを執拗にまわりはじめる．（沈黙）

【「齧らぬうちに」に換えると意味が違ってくる】

（48） やたら直訳していたら，画面はせりふの翻訳でいっぱいになってしまう．映像の邪魔になるうえ，読み終わらないうちに次の画面に移ってしまうことになる．（こと）

【「読まない内に」に換えると意味が違ってくる】

4–2. 「するのを待つ」

主節に「待つ」という動詞がくる場合，従属節の述語動詞には完成相スルが現われる．従属節の事態が主節の継続する運動の終了限界となる．そのような意味で，従属節の事態と「待つ」との時間関係は「まで」と同じく，後続・先行関係となり，主節の事態の終了点と従属節の事態が同時的になる[7]．

例（49）のように従属節完成相スルが〈終了限界達成≠ひとまとまり〉を表すことがある．

（49） 私は部屋の入口のところにある浴室に行き，湯を出しました．それから浴衣に着換えて，浴槽に湯が溜まるのを待ちました．（錦繍）

〈終了限界達成≠ひとまとまり〉を表すには，従属節の述語動詞が無限界動詞の場合，無条件に使うことができない．その代り「しおわる」「しやむ」のような派生動詞を使うことができる．

（50） そこで博士はまたふおっふおっとひとしきり笑った．私と娘は彼が笑いおわるのをじっと待った．（世界）

【「笑うのを」に換えると意味が違ってくる】

（51） 「だったらそうして下さいませ」池端夫人は，不意に泣き始めた．「何もしないうちの子が無期懲役だなんて，．．．（中略）．．．」夫人は泣き伏し阿久津は帰る切掛を探して，泣きやむのをじっと待った．（湿原）

【「泣くのを」に換えると意味が違ってくる】

（52） 「もう，そろそろ，会場を閉めますよ」

男は言った．

男は由梨の見終るのを待っていたようであった．

由梨は踵を返したとたんに，足元がぐらりとして危く尻餅をつきそうになった．（三匹）

5. おわりに

以上では，従属節述語のアスペクトが従属節の事態と主節の事態の時間関係と相関することを見てきた．従属節述語のアスペクトのあり方は「前(に)」節と「(して)から」節・「後(で)」節

[7]「するのを待つ」においては，従属節の述語動詞がシテイル形式をとる例が1例(約1/1300)見つかり，特殊的なものとして扱いたい．

とで時間関係に応じて異なっている．「まで」節述語の完成相の実現するアスペクト的な意味は「(て)から」節・「後(で)」節の場合と同じだが，述語動詞の使用上の制限などその他のアスペクト的な性格は，「前(に)」節の場合と同じで，「(て)から」節・「後(で)」節の場合とは違う．「まで」複文と「前(に)」複文は後続・先行関係を表す複文として一括されているが，「まで」節が主節の事態の限界点を示すということで，純粋に主節の事態より後続という時間関係を表す「前(に)」複文とは違う．両者の区別は時間節述語の実現するアスペクト的な意味の違いの中に見つけ出すこともできるのである．複文全体の把握には従属節のアスペクトとの関わりという側面が欠かせないもので有効であるように思われる．

また，従属節の述語動詞の限界性といった語彙・文法的な意味は，アスペクトと相関し，さらに従属節の事態と主節の事態の時間関係と相関することも見てきた．限界性を表現するものに動詞レベルの場合と構文的レベルの場合があることが指摘されているが，さらに，「しはじめる」や「しおわる」のように単語作りの手続きを通してでき上がる派生動詞の場合もある．開始や終了の局面を表す派生動詞は動詞の限界性表示を助けるものとして機能するので，そういった種類の派生動詞に対する研究は限界性表示という側面からも注目すべきだと考えられる．

付　記

本稿は大阪大学で開催される「土曜ことばの会」(2000年10月7日)で口頭発表した「複文の時間関係と限界性」を大幅修正したものである．準備段階から仕上げるまで高田祥司氏をはじめ，たくさんの方に助けていただき，有意義で丁寧な示唆や助言をいただきました．査読者の先生たちからもたくさん貴重なコメントをいただきました．感謝の意を申し上げる．ただし，本稿における一切の誤りは筆者の責任であることはいうまでもない．

参 考 文 献

井島正博 (1991) 「従属節におけるテンスとアスペクト」『東洋大学日本語研究』4，13–57.

岩崎　卓 (1999) 「マエ節・アト節内のル形・タ形について」『光華日本文学』第7号，15–29，光華女子大学日本文学会.

奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって——金田一的段階」『ことばの研究・序説』所収，1985，85–104，むぎ書房.

———— (1978) 「アスペクトの研究をめぐって」『ことばの研究・序説』所収，1985，105–143，むぎ書房.

小矢野哲夫 (1980) 「『～テカラ～』という構文をめぐって」『日本語・日本文化』9，67–89，大阪外国語大学研究留学生別科.

北原博雄 (2000) 「限界性というアスペクチュアルな性質——動詞句についての，意味論と統語論」『日本語学』19 (臨時増刊号)，72–75.

草薙　裕 (1981) 「従属節および関係節におけるテンス・アスペクト」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』，201–224，大修館書店.

工藤真由美（1989）「現代日本語の従属文のテンスとアスペクト」『横浜国立大学人文紀要』36号，1–24.
————（1992）「現代日本語の時間の従属複文」『横浜国立大学人文紀要2語学・文学39』，169–192.
————（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト——現代日本語の時間の表現』，ひつじ書房.
————（1999）「時間的限界点のタイプ——広義アスペクト的把握の観点から」『日本語学』18–8，15–23.
久野すすむ（1973）『日本文法研究』，大修館書店.
言語学研究会・構文論グループ（1988）「時間・状況をあらわすつきあい・あわせ文」『教育国語』92，93，94，95，2–13，37–46，18–28，18–27.
————（1993）「同時性をあらわす時間的なつきそい・あわせ文——『あいだ』と『うち』」『ことばの科学・6』，141–177，むぎ書房.
近藤真宣（1993）「時間を表わす従属節内のテンス・アスペクトについて」『語学研究』71，135–160，拓殖大学.
鈴木重幸（1965）「現代日本語の動詞のテンス——言いきりの述語に使われたばあい」『ことばの研究』第2集，1–38，国立国語研究所.
杉本和之（1996）「『～たあとで～』と『～てから～』」『愛媛大学教育学部紀要　人文・社会科学』29–1，37–44.
須田義治（2000）「限界性について——限界動詞と無限界動詞」『山梨大学人間科学部紀要第1巻2号』，87–94.
高橋太郎（1974）「連体形のもつ統語論的な機能と形態論的な性格の関係」『日本語研究の方法』所収，1986，233–258，むぎ書房.
立薗洋子（1984）「～まで / ～までに / ～までは / ～にかけて」『日本語学』3–10，21–26.
寺村秀夫（1983）「時間的限定の意味と機能」『副用語の研究』，233–266，明治書院.
成田徹男（1982）「従属節におけるテンスをめぐって」『日本語学』1–12，30–37.
三原健一（1992）『時制解釈と統語現象』，くろしお出版.
森山卓郎（1986）「日本語アスペクトの時定項分析」宮地裕編『論集日本語研究(一)現代編』78–116，明治書院.

A. E. Backhouse and H.C. Quackenbush. 1979. Aspect of UCHI Constructions. In *Paper in Japanese Linguistics*, Vol. 6, 51–86
Bondarko, A. V. 1991. *Functional Grammar*. John Benjamins.
Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*（邦訳: 山田小枝(訳) 1988『アスペクト』むぎ書房）.
Nakau, Minoru. 1976. Tense, Aspect, and Modality. In *Syntax and Semantics 5: Japanese generative grammar*, ed. by Masayoshi Shibatani, 421–82. Academic Press.
Vendler, Z. 1967. *Verbs and times*. In Z. Vendler, *Linguistics in philosophy*, 97–121. Ithaca, New York: Cornell University Press.
Verkuyl, H. J. 1993. *A Theory of aspectuality*. Cambridge: Cambridge University Press.

例　文　出　典

【（或阿）『河童・或阿呆の一生』芥川龍之介 /（或る）『或る女』有島武郎 /（一瞬）『一瞬の夏』沢木耕太郎 /（海へ）『海へ』島崎藤村 /（錦繍）『錦繍』宮本輝 /（さき）『さきに愛ありて』藤原審爾 /（死）『牛肉と馬鈴薯・酒中日記』国木田独歩 /（湿原）『湿原』加賀乙彦 /（忍ぶ川）『忍ぶ川』三浦哲郎 /（射程）『射程』井上靖 /（青春）『青春の蹉跌』石川達三 /（世界）『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』村上春樹 /（銭形）『銭形平次捕物控』野村胡堂 /（他人の足）『死者の奢り・飼育』大江健三郎 /（痴人）『痴人の愛』谷崎潤一郎 /（定年）『定年退職』源氏鶏太 /（点と）『点と線』松本清張 /（なが）『ながい旅』大岡昇平 /（肉体の門）『肉体の門・肉体の悪魔』田村泰次郎 /（楡家）『楡家の人びと』北杜夫 /（野菊）『野菊の墓』伊藤左千夫 /（歯車）『河童・或阿呆の一生』芥川龍之介 /（花埋）『花埋み』渡辺淳一 /（冬の）『冬の旅』立原正秋 /

(旅愁)『旅愁』横光利一 / (驢馬)『忍ぶ川』三浦哲郎 / (以上『CD-ROM 版新潮文庫』】【(沈黙)『沈黙』遠藤周作 / (寺内)『寺内貫太郎』向田邦子 / (しろ)『しろばんば』井上靖 / (人間)『人間の壁』石川達三 / (真実)『真実一路』山本有三(以上，新潮文庫)】【(城外)「城外」小田嶽夫 / (アメ)「アメリカン・スクール」小島信夫/(され)「されど われらが日々—」柴田翔 / (赤頭)「赤頭巾ちゃん気をつけて」庄司薫 / (三匹)「三匹の蟹」大庭みな子 / (限り)「限りなく透明に近いブルー」村上龍 / (愚者)「愚者の夜」青野聡(以上『芥川賞全集』順に 1, 5, 7, 8, 8, 11, 12)】【(夏草)『夏草冬濤』井上靖 / (闇の)『闇の楽園』戸梶圭太(以上，新潮社)】【(俘虜記)大岡昇平『雨の日文庫 4』むぎ書房】【(窓ぎ)『窓ぎわのトットちゃん』黒柳徹子，講談社】【(神の)『神の汚れた手』曾野綾子，文春文庫】【(金田)『金田一耕助の秘密』プレス・コーポレーション，日本電子出版】【(こと)『ことばが招く国際摩擦』鳥飼玖美子，ジャパンタイムズ】【(背徳のメス)『黒岩重吾長編小説全集 1』黒岩重吾，光文社】【(朝日)『朝日新聞』1996】